

永野小学校・学校だより(6月)

『目で育つ』

副校長 小泉啓治

新緑のまぶしい季節となりました。先日5年生が舞岡で田植えを行い、2年生も地域の方のご好意で土地をお借りし、サツマイモを植える準備をしています。学校の花壇や植木鉢の中も春の花から夏の野菜にすっかり衣替えをしています。見ていると、朝夕必ず自分で育てている野菜の鉢を見ている子どもたちが何人もいます。登校してくるとまず花壇や植木鉢を見、下校前にも同じことをしています。その姿を見てずいぶん昔の、あることを思い出しました。

もう30年近くも前のことです。そのころ勤務していた学校で近所の方から水田をお借りしてお米を作っていました。その見回りに行っているうちに、近くに住んでいた農家のおじいさんと言葉を交わすようになりました。ある時、そのおじいさんに、

「作物は目で育つんだよ。」

と言われました。ん??? 正直な話、どういう意味なのかよく分かりませんでした。すると、そんな顔をしている私に気がついたのでしょうか、おじいさんはこんな話をしてくれました。

「毎日毎日、朝・昼・晩と作物を見ていると、自然といろいろなことに気が付くようになるんだ。水が足りない、肥料を欲しがっている、虫が付いている・・・。もちろん雑草が生えてきたり病気になったりしても、毎日見ていれば早く気が付いて手が打てるだろ。目で育つということはそういうことだ。」

なるほどと思いました。『みる』は『見る』ではなくて、『看る』『視る』『診る』なのだろうなと思いました。それからはなるべく朝晩田んぼを見回ることになりました。すると、ザリガニがあぜ道に穴を開けて水が抜けてしまったことも、水路の調子が悪くて上手く水が入っていなかったことも、害虫が付いてしまったことも確かに早く見つけることができました。なるほど、長年の経験はさすがと思ったものでした。

しかし、そのような困ったことに気付くことよりも、やがて別の思いが心の中に大きくなりました。それは、田んぼや稲が見せてくれる一瞬の素晴らしい光景を目にすることができる喜びです。朝、稲の葉先に着く小さな水玉の輝きや、初めて花がさいたときの、籾の間からのぞいている小さな白いおしべに気が付いたときの喜びと感動は今でも鮮明に覚えています。これは、頻繁に見回っていたから気付いたことです。見ることが作物にとってよいことは確かですが、それ以上に私も作物から喜びも与えてもらっているのだと思いました。

その体験から30年近くが経ちましたが、このことは、子どもを育てたり教えたりしていくときも同じような気が今はしています。子どもは親・教師・周囲の大人の目で育つといえないでしょうか。その目からのしっかりした視線が注がれることで、子どもたちは安定して成長するのだと思います。そして、子どもたちを見つめる周囲の大人たちは子どもたちの変容から多くの喜びと感動をを貰っているのではないのでしょうか。

作物は目で育つ。子どもも周囲の目で育つ。そして周囲の大人達も・・・。毎朝自分が育てている野菜を見に行く子どもたちの姿を見ながら、こんなことを考えました。